

NO. 30
March '01

Newsletter

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

ジェンダーと病気／ジェンダーと医療

黒田 浩一郎

私の専門は社会学で、なかでも、これまで健康と病気、保健と医療といった分野にかかわってきた。この分野は「医療社会学」とか「健康と病気の社会学」とか呼ばれている。

この分野はセックス／ジェンダーおよび女性学／フェミニズムとはかかわりの深い分野である。以下では、医療社会学者としての私の活動のなかで、これらの次元がどのように関係してきたかを述べてみたい。

まず、私は最近、進藤雄三氏（奈良女子大学）と一緒に医療社会学のテキストを編集した（『医療社会学を学ぶ人のために』世界思想社、1999年）。本書の構成や章立ては、進藤氏と何度か話し合って決めた。全体を3部に分けることにしたが、第2部は「医療社会学の射程」と題して、医療社会学が今日の病気や医療をめぐる問題にどのように新たな認識の地平を開きうるかを試みた論考をあてることとした。そのうち1章を「ジェンダーと医療」とし、田間泰子氏（大阪産業大学）に執筆を依頼した。

この章で田間氏は、健康／病気および保健／医療のセックス／ジェンダーとのかかわりを、次のように、大きく2つに分けて既存の研究を非常に手際よく整理／検討している。つまり、ひとつは人の体と心がセックス／ジェンダーに基づいて差別的・差別的に医療の対象とされていくという側面である。田間氏はほとんど触れていないけれども、今日、男性より女性の方がなぜ医療機関を利用しやすいのか、というテーマもこれに含まれよう。もうひとつは、医師、看護婦、ソーシャルワーカー、家庭での看病・介護者などの医療の担い手となる者がセックス／ジェンダーに差別的・差別的に配分されるという側面である。今日、大学医学部入学生の半数近くが女性なのに対して、看護学校の入学者のほぼ100%が女性であるのは社会的には「驚くべきこと」だと思う。

次に、私は小さな研究会の世話人をしている。「医療社会学研究会」と称して、大阪で毎月2回の割合で定例研究会を開催している。そこで、会員各自の研究発表をしたり、テーマを設定してそれに関して注目すべき本や論文を読んだり、本を作ったりしてきた。

2001年1月から3月にかけては、「病気・医療とジェ

ンダー」をテーマに、関連する文献を読む予定である。このようなテーマを設定した理由のひとつは、会員の間での関心の高さである。なかでも、近年の閉経（更年期）の医療化、および不妊治療などの生殖技術の発達とその社会的帰結については、それに取り組んでいる会員もいて、こうした会員の関心を考慮しつつ、今は文献の検索と選択に取り組んでいる。

思い返すと、私が大学院時代に取り組んだ研究テーマのひとつも、女性と病気・医療のかかわりであった。この研究では、「女性は男性に比して病気をしやすい」とか「子供の病気の原因の多くは母親にある」とかの考えが女性の間でどの程度浸透しているのか、どのような女性がそのような考えを受け入れやすいのか、そのような考えを受け入れやすいか否かは、女性の家庭での自分の心身の不調の訴え方や自分の子供の健康への注意やそれについての不安などどのように関連しているか、をアンケート調査を通して明らかにしようとした。研究をまとめた論文を、当時、非常勤講師として来ていた上野千鶴子氏に贈って、手紙でコメントをもらったことを思い出す。（文学部教授：医療社会学）

あなたも「ジャン研」へどうぞ

石川 康 宏

「研究会をつくりませんか」。この案内を女性学インスティテュート所員向けに作成したのは2000年4月4日のことでした。『「これだけ女性学／フェミニズム／ジェンダー…がらみの研究をしている教員がいて、しかも研究所まであるのにどこにも意見交換／共同研究のできる場がないのはなぜ?」。そんな素朴な思いをもとに…』研究会の発足をよびかけたいと思います。こんな中身の文章でした。文中の「ジェンダー」はもちろん「ジェンダー」の書きまちがいがいますが、これがきっかけで研究会の略称は「ジャン研」転じて「ジャン研」となりました。

研究会は月1回。月曜日の5限目以降が基本です。毎回のテーマは、第1回「論文『癒されるべき企業社会の「病」・女性差別』を素材に」（石川・5月8日）、第2回「アメリカ文学にみられるジェンダー問題」（三杉・6月12日）、第3回「日本近代文学研究におけるフェミニズム批評の流れと『女の書き物』について、今ど

う考えるか」(飯田・7月10日)、第4回「フェミニズムと心理学」(森永・10月2日)、第5回「15世紀イタリアの医師のまなざしとジェンダー」(高橋友子・11月17日)、第6回「Jポップに見る男と女の言説」(難波江・1月15日)といった具合です。

研究会の「責任者」は決めておらず、毎回、報告の担当者が自分で案内を作成しています。だれが会員でだれが会員でないという区別もしていません。院生もよく参加してくれています。そろそろ、お互いの問題意識の交流も一巡したので「学生に読んでもらえる本をつくろう」という相談が始まっています。「むずかしい専門書にせず、入門的な本にしよう」。今のところ、そういう声が強いです。

ご多分にもれず研究会のあとには「研究会よりも時間の長い」じっくりとした飲み会もやっています。一応「研究会の延長」という位置づけですので「もっぱらそちらが目当て」という方も拒否するつもりはありません。4月になれば研究会の曜日や時間の新しい調整も必要になるでしょう。楽しくやっていますので、これを機に是非あなたも顔を出してみてください。

(文学部助教授：経済学)

連続セミナー「ジェンダーと社会」を担当して

【第1回：2000年10月13日】……………石川康宏

「ジェンダー」は重要な問題だが、私が研究するテーマではない。以前はそう思っていました。それがこの大学に来て、学生たちの就職の苦労やその後の職場生活を見ているうちに、また何人かの同僚と話し合ううちに、これは自分のテーマなのだと考えるようになりました。「資本の論理と家父長制」。それは現代の経済学にとって最も重要な研究課題の一つです。企業における利潤第一主義と女性差別とのかかわり、資本主義における家事労働の社会的位置づけ、そして両者の関連。これがその探求の柱です。

今回のセミナーは私にとって、学外の方にジェンダーをテーマとした話を聞いていただく最初の機会となりました。まだ自分の研究は始められたばかりである。その自覚が心の緊張を高めました。しかし、参加して下さったみなさんの感想は概ね好意的でした。短い時間にすこし情報を詰め込みすぎたかとの反省もあったのですが、激励のことばも含まれたたくさんの感想文からは、研究を次のステップへ高める意欲をいただいたように思っています。自分の中の区切りになる楽しい経験でした。参加者のみなさん、ごろうさまでした。ありがとうございました。(文学部助教授)

【第3回：2000年10月27日】……………三杉圭子

今回はアフリカ系アメリカ人女性作家の作品を二つとりあげ、ジェンダーに束縛されない人間同士の結びつきを手中にする女性主人公たちの成長過程を中心にお話しさせて頂きました。

短い時間でしたが活発な質疑とアンケートを通して聴講者の方々の声が聴けたことは大変ありがたいことでした。私は外国文学という分野でテキスト解釈を中心にしていますが、日本に生きる私たちの問題について示唆を得ることも充分にあると考えています。作品を読んでみたい、映画化されているものを観てみたい、といったコメントの一方で物語の粗筋を聞いただけのよう、熱意が感じられない、といった御批判も頂戴しました。後者の方々はより社会に即した活動家の現場からの報告を期待なさっていたのかもしれません。ジェンダーの問題と切実に向き合っておられる方に御参加頂いたことは誠に頼もしい限りです。私は文学の実用性を疑いませんが、実社会との関わりを改めてみつめなおす必要もありそうです。当インスティテュートがいろいろな角度から女性およびジェンダーの問題について発信してゆくことの大切さを感じました。(文学部助教授)

【第4回：2000年11月10日】……………高島進子

Genderの問題は、人間の尊厳への強靱な感受性の涵養と社会の民主化の徹底を喚起する。Gender Freeな社会とは、各人が、自尊と自主の精神をもて、義務を果たせ、権利を行使できる力をもてる社会だろう。果して、このような品位ある社会の不在と今日の子どもたちの不幸は無関係なのだろうか。

学校は、職場・地域・家庭に比して(男女)平等だと思われる。が、歴史的な文化のひとつ、Gender意識はそこで日常的に再生産され、比較社会・文化的にみても、日本の子どもたちは無意識裡に性を自分が自分であることの基本的な自己確認とする傾向が強い。女子の自己像は消極的で自信に欠け、男子は大人たちの過剰な叱咤激励下にある。

Genderの問題は、これをさらに階層や学歴等とクロスして考え、その上で男女を問わず公正・公平な社会を男女が共に創っていくこと、このような広がりの中で考えたいという思いは、30分を超える議論の中で参加者の支持を得たようだ。同時に、「男性に優しく」ということは「女性は強くなつてはいいのか」という、ときに出る質疑もあった。優しさも強さもいろいろあろう。が、男も女も、人として、共に強く、優しくありたい。

Gender Freeの社会は、まだまだ遠い、と思う。

(文学部教授)

*なお、第2回(2000年10月20日)は牟田和恵氏(甲南女子大学文学部助教授)にご担当いただいた。

『女と男』

われらの内なるセクシズム

頼 藤 和 寛

公の場で書いたり喋ったりする時、ラディカルないしリベラルで、人権至上的で、事実上の性差さえ認めたがらない平等主義の論客というのがいる。それが女性の場合は、まあよくあるフェミニストなんであって、彼女の立場として納得できてしまう。組合員が賃上げを要求したり、電力会社が原発は安全だと主張したりするのと似たようなものだからである。問題は、男性が同様の論旨を言い募り書き散らす場合で、これに二通りある。

ひとつは比較的若い男性に多く、私生活はおろか夢の中まで、およそ性別役割分業感覚がない。仕事・家事・育児・趣味その他、すべて男女平等というより男女等質である。どちらかというとも本人自身も、第一性徴と性染色体以外は男性らしさが顕著でない。これだと首尾一貫しているし裏表がないので、いっそ好感がもてる。いまひとつが曲者で、やや年配に多く、私的なテリトリーに帰ると君子豹変して

「めし、ふろ、灰皿」とか「だれに食わせてもらってるんだ」とかが出る。これは許せん。

誤解しないでいただきたいのだが、このオッサンの正体が男尊女卑のショービニストだから許せないのではない。それならそれで公の場でも呉智英みたいに「わしは封建主義者や」と表明すればいいのである。それをなんぞや、巧言令色、世に阿って学を曲げる。曲げるなら曲げるで、私生活でも女房の下着を洗濯し、隣家の主婦と談笑しながらそれを干すべきである。

さて、わたしはというと明治生まれと大正生まれに育てられたせいか、古典的なセクシズムが染み込んでしまっている。家内も元帝国陸軍軍曹の娘で、けっきょく専業主婦を続けている。ずいぶん古めかしい夫婦ということになる。だから口先だけでフェミニズムもどきの言説を吐くのを潔くしない。そして内心ひそかに「男尊女卑思想は、おとこをおだてて木に登らせる女性陣の陰謀イデオロギーではなかったか」と疑っている。家内に聞いたことがないのは、「ばれたか」と言われたらショックだからである。

(人間科学部教授：精神医学)

—KCCからのお客様—

昨年10月、本学125周年の記念式典が催されたときに、当インスティテュートにKCC (Kobe College Corporation) からプレジデントの Pat Gottschalk 氏、及び古谷夏子氏、David J. Therkelsen 氏、及び Roberta Wollons (Dr.) 氏らのご訪問を受けた。昼食を当方でお取りいただき、その間当インスティテュートの活動などを説明しながら楽しんで下さればと思ったが、訪問者達はそれだけではなく、いかに Kobe College が将来にわたって女性学やジェンダー研究を通して発展していけるか、それにはどのような方法があるかと熱心な問いかけや議論に“花が咲いた”。不用意だったこちらは一撃も二撃もくらった。そして同時に訪問者の方々の熱意や Kobe College に対する献身に感動させられた。これではすまじと思ひ、次の記念式典後のパーティにおいて、訪問者のひとりのインディアナ大学 (ノースウエスト) の助教授で女性学の専門家の Dr. Wollons に高橋友子先生 (文学部) と森永康子先生 (人間科学部) をご紹介し、つかの間であったが親交を深めて頂いた。このような訪問者の我々に協力を惜しまないという姿勢には頭の下がる思いで一杯である。まずは

互いを知るために Dr. Wollons の『女性学評論』への寄稿をお願いすることなど考えられるが、どのように交流していけばよいか、先生方からご意見をお待ち申し上げる。

(女性学インスティテュートディレクター 丸島令子)

2000年度年間活動報告

I 講演会・セミナー等

[前期開催分については前号を参照のこと]

連続セミナー「ジェンダーと社会」(定員30名)

会場：神戸女学院大学デフォレスト館202教室

〈第1回〉2000年10月13日(金)

「企業社会と『家父長制』」

講師：石川康宏氏(神戸女学院大学文学部助教授：経済学)

〈第2回〉2000年10月20日(金)

「セクハラ問題と女性のエンパワーメント」

講師：牟田和恵氏(甲南女子大学文学部助教授：社会学・女性学)

〈第3回〉2000年10月27日(金)

「アフリカ系アメリカ人女性作家におけるジェンダーの問題」

講師：三杉圭子氏(神戸女学院大学文学部助教授：
アメリカ文学)

〈第4回〉2000年11月10日(金)

「ジェンダーと教育」

講師：高島進子氏(神戸女学院大学文学部教授：
社会学)



石川康宏氏

牟田和恵氏



三杉圭子氏

高島進子氏

特別講演会 2000年11月24日(金)

「能とフェミニスト神学～世界にはばたきたいあなたへ、創作能ヨーロッパ上演体験より～」

会場：神戸女学院講堂

講師：湯浅裕子氏(京都国際能楽研究所所長)

協力：神戸女学院大学観世流能楽部

[出席者：170名]



湯浅裕子氏

本学観世流能楽部

学外講演会 2000年12月7日(木)

「摂食障害とはー拒食・過食にみる現代女性」

会場：宝塚市立女性センター・
エル(宝塚市)

講師：生野照子氏

(神戸女学院大学人間
科学部教授：心身医学)

[出席者：45名]



生野照子氏

II 研究助成

「成人の人格研究における性差の検討」

丸島令子[人間科学部・教授]

「フェミニズムと心理学」

森永康子[人間科学部・助教授]

「15世紀イタリアの医師のまなざしとジェンダー」

高橋友子[文学部・助教授]

III 学会等出張補助(国内・海外)

2000年度は申請なし。(2001年1月末日現在)

IV 女性学講座(授業科目名「女性学」)

(1)(2)コースとして前期・後期とも開講された。

V 学生懸賞論文(「女性学インスティテュート賞」)

2000年度(第2回)の選考結果は以下の通り。

〈優秀賞〉(1編)：賞金2万円(賞状)

磯田早穂子氏(神戸女学院大学文学部英文
学科2000年3月卒業)

表彰は2000年10月

13日(金)神戸女

学院講堂において

学院の各種記念賞

授与式とあわせて

執り行われた。



右より：原田園子学長、磯田早穂子氏

VI 出版物

『女性学評論』第15号

特集：ジェンダー～いま、「男らしさ」「女らしさ」とは～
(2001年3月発行)

「ニュースレター」No.29 (2000年10月発行)

「ニュースレター」No.30 (2001年3月発行)

※ 図書の閲覧・貸出希望者は、図書館本館1階
T-14・13室まで。(※貸出・返却の手続きは
T-14室で行ってください。)

2000年度女性学インスティテュート編集委員

川合真一郎、小松秀雄、丸島令子(委員長)、難波江和英、
頼藤和寛(ABC順) 編集事務：豊福裕子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545

E-mail: gender@mail.kobe-c.ac.jp

URL http://www.kobe-c.ac.jp/gender/